

大腸がん検診（職域）

動 向

大腸は結腸と直腸肛門からなり、S字結腸と直腸ががんのできやすい部位と言われている。この大腸がんは日本人に増加傾向が顕著ながんで、検診の重要性が理解されて普及がすすみ、受診者は拡大の傾向にある。平成16年度の職域における受診者数は、昨年度より2,718名増加し、54,796名となった。

当協会の大腸がん検診は、一次スクリーニングに免疫学的便潜血反応検査2回法と自覚症状を主とする問診を行い、二次精密検査として内視鏡検査と大腸X線撮影を併用する方式を採用し、診断精度の高い効果的なシステムを構築している。

大腸精密検査の結果は表4に示すように、精密検査受診率は25.8%と低いが、大腸がん16名（発見率3.3%）、大腸ポリープ235名（同48.7%）等が見つかり、高い検査精度を裏付けている。

大腸がんは、早期に発見すれば治癒が可能ながんであり、定期的検診の更なる普及、拡大が求められている。事業所の健康管理担当者に対し、精密検査対象の方が必ず受診するように、今後とも勧奨をお願いしていきたい。

方 法

大腸がん検診のスクリーニングは、免疫学的便潜血反応検査による便の検査を二日間連続して提出する二日法と問診票からのチェックで対象者を選別している。

精密検査の内容は全大腸内視鏡検査と大腸造影検査の併用法で実施している。併用法の特徴は1回の前処置で二つの検査が可能であること、もう一つは大腸内視鏡検査と大腸造影検査のそれぞれの欠点をお互いに補完しあい欠点を少なく出来ることが最大の特徴である。

結 果

平成16年度の職域大腸がん検診の実施数は表1に示すように54,796人、男37,072人、女17,724人である。前年度よりやや増加している。

検体提出数は表2に示すように検体不適は無いが

2日間採取し提出したのは44,592人で残り10,204人は1日のみ提出であった。このうち便潜血反応検査で陽性を示したのは6.2%、問診表からチェックされた人は0.5%。便潜血反応検査の陽性者の内訳は2日間連続（+）が597人であった。

当施設で実施する精密検査の対象者（表3・Aグループ）は28,762人、男18,575人、女10,187人で要精密検査は6.5%の1,872人である。その内訳は1,698人が便潜血で、174人は問診表からである。実際に精密検査を受診したのは、男353人、女130人合計483人で要精密検査者に対して25.8%の低率である。ここから発見された疾患は大腸がん16人、大腸ポリープ235人、結腸憩室194人、内痔核が128人である。

便潜血反応検査陽性から見た発見疾患は（+）・（+）の二日間陽性者からの発見大腸がんは9人（要精検者の13.4%）を示し前年度7.0%の倍近い、大腸ポリープも40人（要精検者の59.7%）を示す。

1回だけ陽性となった人でも6人（1.6%）の大腸がん発見であった。また大腸ポリープは197人（51.4%）を示した。便潜血反応検査では（-）であったが自覚症状があり要精密検査になった人の中から平成15年度に続き1名の癌が発見された。

これらの事からも大腸がん検診で注意しなければならないことは1回でも要精密検査になったら、必ず受診を勧めることである。

また問診からは大腸がんを1人発見できたことから、今後問診票の見直しも検討する必要がある。また、便潜血陽性者の受診状況でも潜血（+）の受診状況は低率で精密検査に対する解説或いは説明不足から十分な理解が得られてないのではと考えられる。

今後大腸がん検診の重要性を更に追求し便潜血陽性者に対する受診者への十分な説明と理解を求めた精密検査を実行していく必要がある。

関係の集計表は72頁に掲載